

出語りの始

竹田近江、出雲との提携

元祿が終つて世は寶永元年の秋と移つていつた。こゝに義太夫生涯の上に大きな謎が投ぜられたのである。凡そ偉人とか、大藝術家などには往々にして、普通人の知ることの出来ない心境があるものである。これもその一つには相違ない。

竹本筑後掾こと病氣により竹本座の座本を退く。

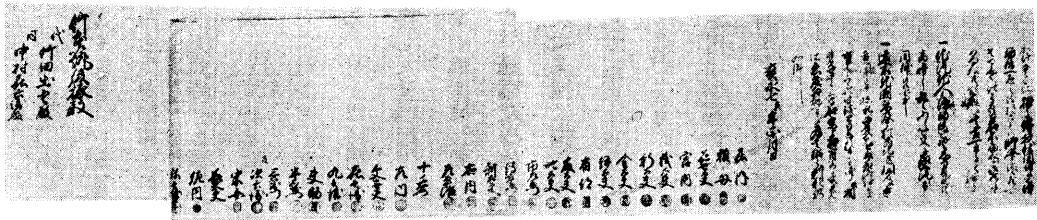
さあ解らない、新派淨瑠璃義太夫節なる一流を興し、生涯をこれに打ち込んでゐる筈の義太夫、十八年間の苦節を忍んで、とても常人の及びもつかない堅忍持久を續け、ちつとやそつとの辛抱でなかつた辛抱をして、惡戦苦鬪をして來た義太夫、而かも近松門左衛門下阪によつて、やうやく『曾根崎心中』なる好狂言を得て、藝術的にも經濟的にも立派に成功したその一年を出ずして、些々たる病氣ぐらいで竹本座の座本を退くといふのだから、ことはいよく解らない、とても想像が出來ない、藝術家にのみ許される、何か特異な心持が突如として義太夫に起つて來たのに違ひない。かうして義太夫は、ひとりさつさと舞臺生活から退いて行つてしまひ。くるくと頭を剃髪して、道喜といふ法號に改め、拍手扇を持つた手に珠數をつまぐり、床本を經巻に代へて、朝夕を御寺詣でに過ごすといふ、たいへんな變りやうである。驚いたのは門弟達である、義太夫節は茲に又新しい境地を拓いて、ますく世間に認められやうとしてゐる大事の瀬戸際、頭領に出てしまはれては、杖に離れた盲目同然、これでは、なんにもかもまる潰れだ。門弟達は當然これを黙つて見てゐるわけには行かない、さつそくに、一同はこぞつて義太夫の面前へ出て、涙をふるつて復座を嘆願した。門弟達が縷々述べるところの一言一句、もとより義太夫節の前途を思ふての上からであり師弟の情まことに濃やかに、熱誠おのづから面にあふるゝばかりである。これを聞いてゐる義太夫とて、もとより人一倍血も涙もある人だ、門生が訴ふるところの至情の言葉には動かされぬわけには行かなかつた。さうして口が義太夫節の百年の後を考ふる時、どうも今度の行動は輕率であつたやうに感じたのである。實を云ふと、義太

夫の腹の底には、例の十八年間の忍苦の生活を追憶すると、今が舞臺の引き潮時だと考へたのでもあつたが、更に又考へ直して見ると、それは一身の安樂、老後の安逸をのみ目がけた功利的な考へであつたと覺つた。義太夫節と云ふ大局から觀れば不忠實である、多くの門弟から眺めればいかにも無慈悲な譯であつた。自分は藝道の爲に身命を捧げてゐる筈であつた、假りにも自分勝手の行ひは許されない、から氣がついて門弟達の前に、生涯を斯道の爲めに盡すことを誓つて、再び舞臺人として復活したのであつた。

これで義太夫節は危く中絶するところをまぬがれたわけである。

義太夫が心機一轉したその時。かねて、からくりや水からくりの發明で成功した竹田近江がその子の出雲に財産を預けてやつて、人形淨瑠璃の經營をやつて見やうといふ考へを持つてゐたそこで義太夫に說いた、義太夫は悦んで、一番重荷に思ふて居た竹本座經營上的一切物質的責任を彼に譲つて、ヤレ〜と安堵した。以來座本はいよいよ竹田出雲となり、義太夫はこれで藝道一方に精進出来ることとなつた。

淨瑠璃史上に記念すべき組織改革後の竹本座の第一回興行が、いよいよ開場されることとなつた。時は寶永二年三月二日初日（異説十一月）近松門左衛門作『用明天皇職人鑑』を上演。此時あらためて竹本座から發表してゐる繪本淨瑠璃『用明天皇』の表紙見返しの繪にある、幹部連名を見ると、座本竹田出雲太夫竹本筑後掾、三味線竹澤權右衛門、おやま人形辰松八郎兵衛、作者近松門左衛門として畫像と名とが記されてゐる。近松が大阪に永住するやうになり今までの囁託の作者から、判然と座附作者として招聘されたのは此時からであらうと思はれる。名にし負ふ豪華をもつて鳴つてゐたからくり成金の竹田近江が後見となつて、名目上の新座主出雲を督して經營案を立て、人形の作り替へ、衣裳の新調、道具の改造、すべては一變して華美に成り、舞臺面の轉換には得意のからくり細工を應用し、嶄新的趣向を創め出したのである。従つて在來の竹本座の執つた藝術本位の方針は第二義となり、夥しく興行的色彩が濃厚になつて來たのだが、義太夫は何んな顔をしたらうか。おそらく微笑を洩らしてゐた事と思はれる。さて新座主は作者、太夫三味線、人形に當代第一流を網羅したその上に、嘗て豊竹座を創立した若太夫がその當時休演してゐたので臨時應援として



教訓連盟

これも一座に加へることになり思ひきり花やかに蓋を開けたが爲に、これまた非常な大當り大好評であつた。

近松はこの記念興行を祝福する爲に、狂言中に竹田家の意を體して記念文字を入れてゐる。第一段内裏の一節に、勅詔あつて、諸國の職人に官位を與へ、官名受領の認許あるくだりの文中

此時よりや諸職人、今も國名を許されて時に近江や世に出雲。そのよろづ代も竹の名の、筑後の末長き御代に住む身ぞ豊がなる

義太夫はまた、この興行に始めて舞臺に顔を現はして演することを試みてゐる。さうして第三段目の『鐘入りの段』の景事を出語りして、見物を喜ばせた。たゞに見物を喜ばせたばかりでなく、これがそもそも～太夫出語りの濫觴なのだから、すこし當時の實際を述べて置かう。

戯曲や歌舞の類に謡曲道成寺を轉用した所謂『道成寺物』と稱するものは、可なり澤山にあるがこの鐘入りの段も、つまりはそれで頗る奇抜な趣向に劇化してゐる點、殊にその構造の群を抜いて大まかな點から見て謡曲以上かも知れない。謡曲では貴族的優美な白拍手であるシテ女を極めて民衆的な焚飯女に變へて登場させ『これは此國の傍らに、下司奉公の勤めをいたす飯焚きの女にて候』と語らせ、先づ見物の意表に出て耳目を驚かしてゐる。これは單に奇抜な趣向をしたといふばかりでなく、町人の都としての大坂の土地にふさはしく、作者が平民化した一つの見識でもある。而かも此一段の文章は、作者獨特の景情備はつた麗文で、絢爛自在の趣きがある。こゝを演者義太夫は苦心の節調で語りこなしたのだから、この一幕が當興行中隨一の呼び物になつたのは當然である。日本で始めて出來た遊君の元祖、播州室の津の室君が、假りに飯焚きの女中に姿をやつして、その夫が世を忍ぶ播州高砂尾上の濱へ訪づれてくる。そこには海中から現はれた天竺の祇園精舎の名鐘があつて鐘供養が行はれてゐる。女人の出入りは禁制といふことになつてゐるが室君はある誤解から嫉妬に燃へ立ち心も狂亂して、鐘供養の庭へ侵入する。そして鐘の中へ姿を隠す。この大騒動に、豊國禪師が弟子を引連れて出て大祈禱をすると、功驗忽ち現はれて鐘は自づと躍つて鐘は鐘樓へ引き上げられる。『アレ見よ蛇體は顯はれたり』でいよ／＼一日中の大評判である『鐘入りの段』が始まるので

ある。

當時の舞臺の有様をいふと、正面に翠簾が吊るされてゐて、太夫三味線彈き等はその内部で勤め、人形遣ひはその前面で技藝を演じたものである。舞臺の全部を今日の文樂座で見るやうに總て人形の領分に占有させ、太夫三味線の席が側面に遷された形式は義太夫や近松後援の變革である。この變革がやがて操淨瑠璃が歌舞伎に壓倒されて行つた變轉を物語るものだと云つてもよい。

さて此時、この晴れの記念興行を意義あらしめる爲め、義太夫はいつも翠簾の内で語る例を破つて、それを高く掲げさせ、顔を見物に現はして語る例を始めた、この新しい形式を出語りと稱したのである。いよいよ鐘入りの段となると、正面の簾がさら／＼と上る、そこにはシテ、竹本筑後掾、が見臺を控へ、鱗形の模様のある袴を着て（室君の蛇身に因んで）一刀を佩し、扇子を斜に構へて座つてゐる。ワキには竹本難波、三味線の竹澤權右衛門が九枚袴の紋模様の袴に三味線を抱へてズラリと居並ぶ。かういふ舞臺の光景に始めて接した見物はドツとばかりに喝采した。

その前では、これもおやま人形の辰松八郎兵衛が全身を現はして、曾て曾根崎心中で試みた出遣ひの形式で、思ふ存分室君の蛇體を操つて満場を醉はしめた。

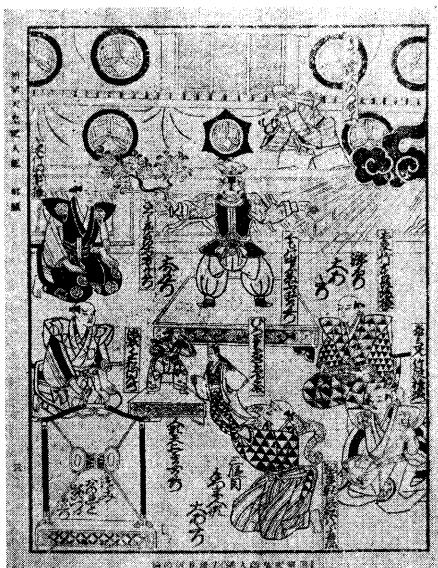
なほ又義太夫はその冒頭の名文、

源川戀の氷に閉ぢられて、身を切り碎く思ひより、浮き川竹の憂き節を、せめて閏もる月だにも、あはれ枕に訪ひも來ず、我れ一人寝こなりたるぞや。

ひさり立つたる一こそもぞ薄、妬みの露の重たさよ。

特に巧い節調で語り生かしたものと見へて、市中の一口淨瑠璃にも口ずさまれたといふことである。

なほもう一つこの淨瑠璃で、義太夫の見識といふものが現はれて感銘のふかい事は、本文のうち、廓の遊女の年中行事、紋日の事を述べたくだり人のよろこび日を云へば、我はなげきのます鏡に節付けられた『愁ひの冷泉節（れいぜんぶし）』についてである。



圖の「鏡入鏡天明用」

本来冷泉節といふものは、古淨
瑠璃『十二段』にある『さてもや
さしや冷泉』の句につけられた華

やかに艶麗な節廻しを云つたもの
で、（冷泉とは三河の國矢矧の長

者の娘淨瑠璃姫に仕へた侍女の名
である）あるが、義太夫はわざと

これを愁ひの文章に使用したので
ある。かうした試みは、古淨瑠璃

の人から見ると、破格の振舞、異
端の業で、果せるかな批難の矢を

浴せられたが、義太夫は自己の信*



*念の上に試みたことだからビクともしない、歡樂の極み

と哀傷の極みはわづかに薄紙一枚を隔てた差異に過ぎない、廊の女の愁ひ華やかなうちに悲しみを表はさねばならない、艶麗なうちにも何處か哀愁を帯びた『冷泉節』こそ恰好の節調であると信じたからである。これは勿論口で語るといふより心持で情を活かして語らねばならぬだけに、古來至難の節調として傳へられてゐる。されば二世竹本義太夫（政太夫）もその門下に説いて『これは愁ひの冷泉なり、常の冷泉に語れば、人形いそ／＼として嬉しさうに躍るべし、文句に氣をつけるべし』と訓へてゐるほどである。

六十四歳を一期

義太夫終焉ニ墓地

用明天皇職人鑑以後の十年、義太夫はひきつゞいて、竹本座に出演してゐるが、記録はその上演狂言を左の如く示してゐる。これはもとよりその重なるものであるが。

『傾城反魂香』『心中二枚繪草紙』『兼好法師物見事』『碁盤太平記』『曾我扇八景』『吉野忠信』『堀川波の鼓』『絆縮緬卯月紅葉』『同潤色』『丹波興作』『酒呑童子枕言葉』『心中萬年草』『淀鯉出世滝徳』『五十年忌歌念佛』『梶狩劍本地』『今宮心中』『百合若大臣野守鑑』『心中刃冰朝日』『夕霧阿波鳴門』『冥途の飛脚』『吉野都女楠』『嫗女姥』『傾城吉岡染』『長町女腹切』『天神記』『孕常磐』『大職冠』